

◆◆館蔵品紹介◆◆

紅蓮 石川梅子 (1890-1973)

大正9年(1920) 絹本着色 129.8×41.8cm



大きな紅蓮の花が3輪、眩しく輝きだす。花びらは薄く、裏から光が当たらないとこれほどまで明るくは見えないのに不思議です。赤い縁取りと条線によって紅にほかされた花卉の白さがまばゆく、内から発光しているように見えるのは、画家の心の高ぶりが絵筆から紙へ伝わったからではと思われます。

上の2輪は軽やかに花冠を空に向けて立ち、下の花は正面を向くので内側の花卉を全開させ、花托と雄蕊が露わです。こちらも水面から凜として立ち上がる姿を見せるはずが、細い花茎はほとんど緑の大きな葉に隠されてしまい、足元に覗く茎のどれが3輪目のものなのか知りません。緑青で塗り込められた大葉はどれも肉厚で、臍から放射状に葉脈を走らせ、並ぶように正面を向く。主役の3輪を引き立てるために風にゆれることもなく、静止した大柄のバックダンサーのようです。

葉中心の凹みや、他の葉に隠されてしまった葉には、早朝の闇がうっすらと残っていて、まだ、強い陽差しで黄緑色に変わってくる前の時間帯を想わせます。古色がかった落ち着いた黄土色の地は朝方の空色の気配ではなく、ただの抽象的な無地空間になっています。下辺の葉の隙間から透ける部分は青みがかっていて、蓮池の水面を意識しているのでしょう。1枚だけ水から丸まって立ち上がってきた巻葉があり、その周りには立ち上がることのない小さな浮葉が散らばっています。元花の分からない落ちた花卉2枚が宙に浮いたように描かれています。

以上、眼を引かれるところ、注目の部分を見てきました。この作品を描いた石川梅子は、花鳥の写生を通して写実的な描写力を独学で身につけ、江戸琳派の絵師から近代日本画の作家へ受け継がれた平面的、装飾的な表現に学んで、蓮葉などの対象を大きく明快に扱って表現しました。紅ぼかしで包まれた白さと葉の濃い緑を明確に対比させて、装飾性豊かに仕上げています。夢幻の情趣をただよわせる注目の作品です。大正9年2月の第14回読画会展の入選作になります。同郷の画家江森天寿と出会って4年、

師弟関係から深い愛情で結ばれる仲になったのもこの年だったそうです。ところが、2人に残された時間は残りわずかに5年しかありませんでした。天寿が結核にかかってしまうのです。また、2人とも結婚を望んでも、天寿の母がそれを許しませんでした。

さて、石川梅子をご存じでしょうか。Webで検索しても、当館の10月8日からの展覧会情報の他、平成16年(2004)年の東京家政大学「若き石川梅子の日本画」展の過去記事と、ご息女石川好子さんが、父母の日本画作品を編集出版された『定本江森天寿・石川梅子』(平成12年)の蔵書情報が見つかります。知名度は高くはありません。そこで、上記の定本収録の年譜などを参照して、梅子「紅蓮」作の大正9年までの略歴を辿ってみましょう。

石川梅子は埼玉県深谷市の中山道随一の酒造店石川屋に生まれました。幼少より長唄、箏を習い始め、書画や裁縫にも秀でる少女でした。15才の時にミシンを買ってもらい、ミシン刺繍に取り組みます。翌明治39年(1906)に東京裁縫女学校(現東京家政大学)に入学、その年の暮にミシン刺繍の個展を神田で催します。本当は日本画家志望でしたので、鳩山春子の紹介で川合玉堂に入門しました。大正5年には両親から実家の近隣に新築家屋を贈られ、26歳で独立して女子に諸芸を教える私塾を開きます。ミシン刺繍の注文もあり多忙な時期に、三つ歳上で新進気鋭の日本画家江森天寿の存在を知ります。東京美術学校を優秀な成績で卒業した天寿の弟子となり、正統なる日本画を学ぶチャンスを掴みました。着実に画技を身に付け、早くも翌大正6年の読画会展に「初夏」「晩秋」が初入選します。天寿に入門する前から梅子が熱心に行っていた写生が、すでに独学の域を越えていたことを物語る素描が数多く残されています。

- 大正5年(1916) 梅子、深谷の自邸にて私塾を開く
天寿と出会い、弟子となる
- 6年 天寿の勧めで読画会会員になる
- 3月 梅子、読画会展に「初夏」「晩秋」出品
- 7年2月 梅子、読画会展に「つつじ」出品
- 4月 梅子、明治絵画会展に「秋」出品
天寿は結核になり体調を悪くする
- 8年1月 神田明神開花楼で読画会新年会に
天寿と梅子がそろって出席する
- 3月 梅子、読画会展に「春の庭」出品
- 9年2月 梅子、読画会展に「紅蓮」を出品

大正7年の梅子出品作「秋」は、黄に色づく葉の間から野鳥ウソが一羽、枝に休んでいる絵で、下辺中ほどより右上へ延びる柏の幹が太やかに描かれる。その木の配置と枝ぶりが、菱田春草「黒き猫」(明治43年第3回文部省美術展出品・永青文庫蔵)の柏樹に近似しており、梅子はそこから大胆に単純化する構図法を倣っています。19歳の梅子が文展会場でこの絵を実見したかは分りませんが、絵からの感動が大きく自作に採り入れたのでしょうか。師の天寿がこの部分模倣に気が付かないはずはなく、出品に際してどう対応したのでしょうか。菱田春草も江戸琳派の鈴木其一きいつ ほおのき「朴に尾長鳥図」に取材して「かけす」と題した作品を描いており、琳派の作品からも学んで、新しい装飾的表現を造り出していました。

そして、注目の作品がもう1点あります。江森天寿は東京美術学校在学中から荒木寛かんぼ門下となり、寛畝の嗣子十畝が創立に係わった読画会に入会、明治40年の読画会展で画壇デビューをします。大正6年に梅子も読画会入会を認められ、ここから展覧会活動じっぽをスタートさせます。この6年10月、同会の運営者荒木十畝が第11回文展に出品したのが「四季花鳥」(山種美術館蔵)の4幅対で、四季の花々を豪華絢爛に描き上げた大作です。天寿も「秋二趣」双幅が入選しましたので、悦んで梅子を連れて展覧会へ出かけたでしょう。梅子はそこで、「四季花鳥」の画面一杯に咲き誇る花々、あふれる色彩に圧倒されたはずです。色彩を抑え気味に、鮮やかすぎないようにする天寿の色使いとは全く違います。刺激を受けて、次の作品にそうした彩色表現を試みてみたいと思ったかもしれません。

紅蓮の制作以前に紅色の蓮を写生した素描が4枚あります。紅蓮2輪を描いた素描左の花は「紅蓮」の3輪のうち左の花の姿と似ています。花卉の位置や形は調正をしています、本画制作に使われたと考えられます。

梅子「紅蓮」出品の読画会展における天寿作は「夏草」で、翌年の第15回展に真っ赤な花で画面を埋める「曼殊沙華」を出品します。既に結核が進行中でしたが、普段は色彩を抑えていた天寿が、梅子のこの「紅蓮」の輝く生命力に感化されたのか、作風を変えたように思われてなりません。(久保木彰一)



古代アンデス羽根縫付け貫頭衣の裏打作業報告 井上 則子

当館では2019年度に、中南米美術研究家の三浦鴻氏より387件に及ぶ中南米の古代及び現代の染織品や土器等の収集品をご寄贈いただいた（「たより」59号にて報告）。ご寄贈品には、長さ3メートルを優に超える古代アンデス・チャンカイ文化（紀元後1100～1470年頃）のユーモラスな描絵布、そしてシグワス文化（シグワスⅠ期 紀元前500頃～後100年頃）の現代抽象画を思わせるような文様織布など、当館既存の所蔵品にはなかった、あるいは完品として所蔵していなかった種類や地域の布も多く含まれている。

特に「羽根縫付け」と呼ぶ技法を用いた資料は、当館ではこれまで小品と裂を各1点ずつ所蔵していたが、今回、ほぼ完形品の貫頭衣を4点ご寄贈頂き（図1、3はその内の2点）、古代アンデスの染織コレクションをより充実させることができた事は嬉しい限りである。



図1 擬人化された太陽・蛇文様羽根縫付け貫頭衣
ペルー ワリ文化（後700-1000年頃）
149.0×92.3cm（開いた状態の寸法）
*茶色の基布、白地に赤、青、黒、白で文様

通称「羽根織」とも呼ぶこの技法は鳥の羽根の色彩を活かし、文様にあわせて羽根を糸で縫付けていく技法である。主にアマゾン源流地帯よりもたらされたコンゴウインコやオウムなどの色鮮や

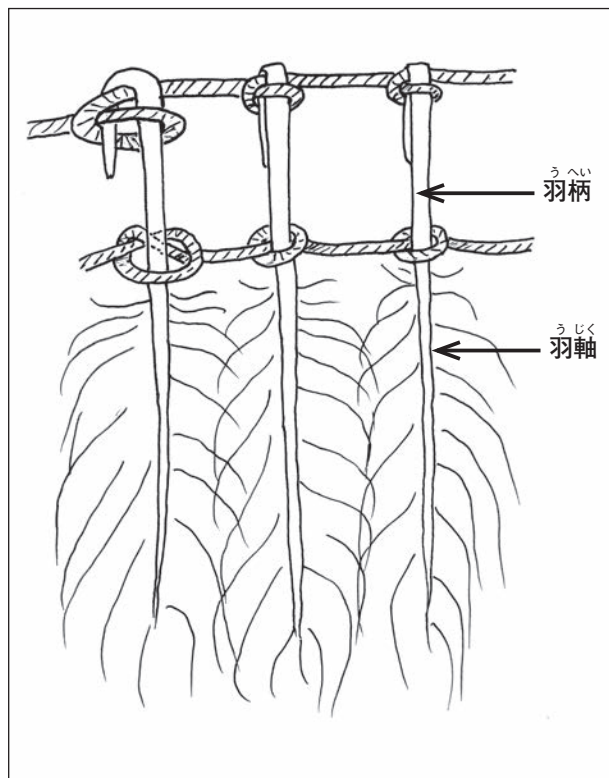


図2 図1上部、赤い双頭の蛇文様の羽根の結び方

かな鳥類の羽根が利用され、非常に華やかで人目を引きつけるため、祭祀の際などに用いる儀礼性の高い衣料と考えられる。羽根は同色のものを糸で結び連ねて用いるが、その手法は複数知られる。その1例を図2に示した。先ず羽柄の先を折って糸で結び留めて、これをいくつも横に連ねていく。羽根は下向きにそろえ、これを安定させるために別の糸を結びつけることも多い。こうして出来上がった「羽根リボン」を、文様に合わせて基布に置き縫い付けていく。羽根リボンを重ねることで羽柄の部分が隠れ、ボリューム感が増し、羽根の色彩の美しさが引き立てられている。

ご寄贈頂いた4点の貫頭衣はいずれもペルー南海岸地方から出土したワリ文化（紀元後700～1000年頃）と考えられるもので、図1の他、幾何

学文様（図3）やラクダ科動物文等の貫頭衣がある。いずれも中央に頭を通す切れ目があるので貫頭衣と判るが、脇縫いがされていない。恐らく、いずれも図3に見られるような紐で固定したと考えられる。このような形態の貫頭衣を、「ポンチョ



図3 幾何文様羽根縫付け貫頭衣
ペルー ワリ文化(後700-1000年頃)
90.0×92.4cm※ページの基布、赤地に
黄半円文に黄と青の線文

poncho（ケチュア語 punchu→スペイン語→英語）、「チュニック tunic（ラテン語 tunica→英語）」、あるいは「ウンク unku（ケチュア語）」（いずれも日本語では「貫頭衣」と分けて、「タバード tabard（中世ヨーロッパの紋章入りの陣羽織）」と呼ぶ研究者も多い。

昨年より今年の初めにかけて、寄贈された羽根縫付け貫頭衣4点の内、本年度開催予定の展覧会「不思議？なるほど！古代アンデス工芸の魅力」（p.8参照）に出品予定の2点について、壁面展示を可能にするため、裏打ち作業を行った。「裏打ち」とは、そのままでは脆弱な布に裏布や接着芯を縫い合わせたり貼ったりして補強することをいう。接着芯は接着剤を塗布した布で、アイロンの熱で貼り付け可能であるが、接着剤が表面に出てきてしまうことがあり、古い染織品では使用できない。通常当館の古代アンデス染織品の裏打ちは主に木綿無地布を用いており、今回も同じ手法で作業を行うことにした。以下に2点の羽根縫貫頭衣の内、図1の貫頭衣の裏打ち作業の過程を報告する。

1. 状況確認

羽根縫付け貫頭衣の傷み具合を確認し、裏打ち可能か否かの判断を行う。今回作業をすることにした貫頭衣は既に裏打ちがされていたもので、羽根の抜けが酷い部分もあったが、基布が比較的しっかりしていた。ただし元の裏打ちは、油絵で用いるキャンバス地が使われ（図4）、固さとごわつきのため資料に引きつりが起こる心配があるため、一旦これを外し、新しい裏打ち布に縫い付けることにした。羽根自体はすり切れているものも多く、基布からはずれているものも散見された（図5）。糸で縫い留められないほど羽根や基布が傷んでいる部分は化学繊維のチュール（薄い網状の布）で覆われており（図6）、この部分は縫い直すと傷みが進行するのでそのままにし、中に落ちる羽根の細かな破片のクリーニングのみ行うこととした。



図4 裏打ちのキャンバス地



図5 痛みが甚だしい羽根縫付け部分



図6 傷んだ基布に被せられたチュールと、部分的な裏打ち

2. 裏打ち用布等の準備

今回は中厚手の黒木綿地を用い、糸は縫い付ける部分の色味に近いものとナイロンの細い透明糸を用意した。また羽根の傷みが酷い部分は糸で押さえられないため、以前に施されていた修理の方法と同様に（図6）、目の細かいチュールを被せ、押さえることにした。

3. 裏打ち布の交換

元のキャンバス地の裏打ち布を外すと、基布の傷みのある部分ごとの裏打ちが複数行われていたこと



図7 部分的な裏打ち



図8 新しい裏打ち布に置く

が判った（図6、図7）。これを解いてしまうと弱っている基布部分が更に痛むので、このまま全体的な裏打ちをすることにした。図8は新しい裏打ち布に置いたところ。この布は縫製前に一度水通しを行い糊や埃を落とし、アイロンがけをした。裏面上部には、壁面に吊るす際に用いる棒通しを付けた。

4. 貫頭衣の周囲から裏打ち布に縫い留めていく

部分的な裏打ち布がある箇所はその裏打ち布を縫い、無い部分は基布の織目に入れるように針を刺していく（図9）。できるだけ基布に近い色の化繊または絹の糸（50番手＝普通の太さ）を使用した。



図9 織目に針を通しながら裏打ち布に縫い付ける



図10 チュールを被せる

5. チュールを被せる

羽根の浮きがある部分、基布が弱っている部分にチュールを被せる（図10）。チュール部分に使用する糸は、透明のナイロン糸「モノカラー（（株）フジックス製）」を使用。チュールの色は透明と薄茶で、被せる部分の色彩に合わせて使い分ける。羽根の浮きは、糸で留められるものは縫い留める。



図11 基布の穴にチュールを被せる

6. 基布部分の穴で、縫い留めることができないほど弱っている部分はチュールを被せる（図11）。この場合、透明糸の光沢が基布に合わないため、基布の色に合わせた糸を使用した。

7. 最後に筆や小型のハンディクリーナーで、糸や羽根の屑などを清掃した。

今回の裏打ち作業では羽根の浮きを、基本的にチュールを被せることで防ぐ手法をとった。入手し易い材料を使える利点はあるが、劣化して剥落した羽根のかけらや糸屑などがチュール内に溜まるという欠点もある。またチュール部分が目立つこともある。

収蔵庫への保管の際は、できる限り折りたたまないように広げ、平らに置く。展示室に飾る際には、スペースの関係上壁に吊るすことになるが、羽根が落ちるのを避けるため、慎重に取り扱う必要がある。一旦基布を離れた羽根に関しては、剥離箇所が明らか場合はその場に戻し糸で固定するが、分からない場合は小袋に入れ保存しておく。将来、鳥の種類の同定をすることになれば、これを用いることができるであろう。

余談ではあるが、現代の北アメリカ先住民の用いる儀礼用の羽根の頭飾りや扇などには、意味があってその鳥類の羽根が選ばれ、その場所に用いられているという。従って、修復の際、捕獲や輸入が禁止になっている本来の鳥の羽根の代替として、他の類似する鳥の羽根を用いることは、それまで伝えられてきたメッセージを変化させてしまう可能性があるという指摘がある（注1）。古代アンデスの羽根縫付け布では、単に羽根の光沢による輝く色彩の文様を表したかったのか、あるいはその鳥毛選択に

もメッセージ性を持たせたかったのかは不明である。また16世紀に新大陸がスペインやポルトガルによって征服された当初、西洋社会に知られるようになった羽根を用いた衣料は、西欧人には奇異で野蛮なものとして映っていたという（注2）。しかし日本では、古くから正倉院の「鳥毛立女屏風」に代表される調度品や、戦国武将の陣羽織などの衣料に重用されていた（図12）。他に代えがたい独特な印象を持つ鳥の羽根という素材に対峙した時の、地域や時代による人々の認識の相違は興味深いものである。



図12 陣羽織 黒鳥毛「太白」文字模様
安土桃山～江戸時代(16-17世紀)
東京国立博物館蔵
出典:ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

注1) Ellen Pearlstein, "An Introduction to The Examination, Documentation, and Conservation of Featherwork", in *The Conservation of Featherwork from Central and South America*, Archetype Publications, London, 2017.

注2) Warwick Bray, "Crop Plants and Cannibals : Early European Impressions of the New World", in *Mortimer Wheeler Archaeological Lectures in 1992*, The British Academy, 1993.

特別展「江森天寿と石川梅子 夭折の画家と県内初の女流画家」

2022年10月8日(土)～11月27日(日)

埼玉県深谷市出身の日本画家江森天寿（1887-1925）は東京美術学校を卒業後、大正4年（1915）の文部省美術展に初入選、深い自然観照と独特の絵画表現の作画を続けますが、結核により38歳で生涯を閉じました。同郷の石川梅子（1890-1973）は天寿より3歳下で、天寿と運命的に出会って、念願であった本格的な日本画を習い始めます。師弟関係からお互いに深い愛情が生まれ新生活を始めますが、間もなく天寿は体調を崩して症状が進み、余命は僅かになっていきます。その時期に天寿が梅子に与えた手本の花鳥画と、梅子の展覧会出品作を中心に展覧します。2人の遺子好子氏より当館に、平成7年（1995）に寄贈された作品になります。また、天寿の文展初入選と同じ絶頂期の作品になる「裾野の秋」（埼玉県立近代美術館蔵）や、17歳（明治40年）の梅子が独学で鳥や花卉を写生していた素描とミシン刺繍などを通して、2人の画業を辿ります。



江森天寿 「裾野の秋」大正4年
埼玉県立近代美術館蔵



江森天寿 「松上群鴉」大正8年頃
当館蔵(以下同じ)



江森天寿 「溪流」



石川梅子 「寒牡丹」
大正8年



石川梅子 素描 明治40年



石川梅子 素描「竜胆」



石川梅子 ミシン刺繍
「水汲みの女性」明治40年

記念講演会 Zoom 開催

「江森天寿と石川梅子－好子がのこした物語」 日時：10月9日(日) 午後1:30～3:30

- 講師：佐藤道信（東京藝術大学教授）
- 参加費：無料 ● 定員80名（先着）
- 申込み：メール：tkkk@e-kinenkan.com

新型コロナウイルスの感染状況により、対面式（定員：30名/参加費：300円/会場：遠山記念館会議室）を追加募集する場合があります。詳細は当館公式サイト <https://www.e-kinenkan.com> でご確認をお願いします。

テーマ展「不思議？なるほど！ 古代アンデス工芸の魅力」

2022年12月10日(土)～2023年1月29日(日)

南米ペルー、ボリビアを中心とするアンデス地方には、16世紀のスペイン人による征服以前に盛衰した様々な文化が生み出した土器や染織の数々が遺されています。古代アンデスには文字による記録がありませんでしたが、遺跡からの出土品に表された様々な文様や形態には、当時の生活の様子や宗教観を生き生きと伝えるものが数多く見られます。この展覧会では、2019年度に寄贈された三浦鴻氏（中南米研究家）収集品の初出品（写真1、4）を含め、当館所蔵の約60点の土器と染織品を展示し、洗練された意匠と巧みな造形力で生み出された古代工芸の魅力に迫ります。



1. 加彩鹿頭飾付双把手付壺
チャンカイ文化(後1100-1470頃)



2. とかげ・神人文様織布
モチエ文化(後100-800頃)



3. 彩画神人文様壺
ナスカ文化(前200-後500頃)



4. ラクダ科動物文様羽根縫付け貫頭衣
ワリ文化(後700-1000頃)



ギャラリートーク(Zoom開催)

2023年1月14日(土) 午後1:30～2:30 担当:井上則子(当館学芸員)

●参加費：無料 ●定員：80名(先着) ●申込み：メール：inoue@e-kinenkan.com
*受付期間：11月15日(火)～2023年1月13日(金)

テーマ展「雛の世界」 重要美術品「武陵桃源図巻」全場面一挙初公開!

2023年2月11日(土・祝)～3月12日(日)

立雛（次郎左衛門頭）、享保雛、古今雛や近代の名工である久保佐四郎、永徳齋、大木平藏の雛人形などを中心に、江戸時代中期から昭和時代中期頃までの様々な種類の人形を展示し、日本の人形の歴史をたどっていきます。

また今回は桃の節句に因んで、重要美術品「武陵桃源図巻」を出品いたします。従来当館では、長い卷子装の作品は、展示ケースの都合上、全て開いた状態で展示することができませんでしたが、展示室のリニューアルにより、本年度、初めて作品の全場面を公開することが可能となりました。桃の花が咲き乱れる理想郷を描いた、江戸時代中期の絵師、呉春の傑作をぜひご堪能下さい。

併せて、遠山邸の大広間では、十畳の座敷いっぱい飾られた「遠山家の雛壇飾り」もご覧いただけます。



「立雛(次郎左衛門頭)」
江戸時代中期-後期 18-19世紀



呉春「武陵桃源図巻」
江戸時代中期 18世紀



「遠山家雛壇飾り(御殿飾り部分)」
大正時代 20世紀

2021年度 新収蔵品

つぎの作品及びコレクション等のご寄贈をいただきました。心より感謝申し上げ、ご紹介いたします。

◇小林桂子 様(織物研究家・作家 東京都目黒区)

・作品及び織資料 27件



小林桂子「貴婦人の首飾り」2022年

◇三浦鴻 様(中南米研究家 東京都杉並区)

・ペルー、チャビン文化(前800-前500年頃)
の褐色陶刻線獣神文大鉢の土器片 一括



◇遠山公一 様(当館理事長 東京都渋谷区)

・パブロ・ピカソ“Tête de Femme”(写真右)
・ジュゼッペ・カボグロッシ“Superficie 579”
・ルーチョ・フォンターナ“Concetto spaziale, Nature”
以上3点



パブロ・ピカソ“Tête de Femme” 1953
©2022 - Succession Pablo Picasso - BCF(JAPAN)

また、下記作品を購入しました。

・狩野養長「平治物語絵巻(模本)」江戸時代後期(62号で紹介)

2021年度 催事報告

50周年記念連続講座「遠山記念館の重要文化財」(Zoom開催)

4月17日 「佐竹本三十六歌仙絵を味わう—歌と肖像の情緒—」

講師：井並林太郎氏(京都国立博物館)

4月24日 「風流才子・英一蝶 —「布晒舞図」を中心に—」

講師：池田美美氏(サントリー美術館)

5月8日 「大坂の南画家 岡田半江」 講師：星野鈴氏(前東京造形大学教授)

5月16日 「源頼朝書状と山城介久兼・畠山重忠」 講師：清水亮氏(埼玉大学)

5月22日 「秋野蒔絵手箱—蒔絵を楽しむ—」 講師：永田智世氏(根津美術館)

5月29日 「はじめての寸松庵色紙—書かれた当初の姿と千年伝来—」

講師：久保木彰一(遠山記念館)

「織の世界に遊ぶ心—小林桂子の布創り—」展関連催事

11月6日 オンライン講演会「世界の布から生み出す糸遊び」 講師：小林桂子氏

●遠山家雛壇飾り 2023年2月11日(土・祝)～3月12日(日)

雛祭りの季節に合わせ、遠山邸の大広間で十畳の座敷いっぱいには飾られた雛壇飾りをご覧ください。これは遠山元一が、長女貞子（大正9年生まれ）の初節句の祝いとして揃えたもので、京都御所の紫宸殿風の館に人形を飾る「御殿飾り」と、関東風の「段飾り」との二組で構成されています。「御殿飾り」は檜の樹皮で屋根を葺いた檜皮葺きで、すべて組み立て式になっており、また「段飾り」は七段で、特に五人囃子と隨身には日本橋十軒店の名工「永徳齋」の商標が付いています。



※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、現在、遠山邸の2階特別公開及び邸宅の解説は中止しています。

●ご来館のみなさまへ●

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、以下の点にご協力をお願いいたします。

- ・37.5℃以上の熱のある方、咳・咽頭痛などの症状のある方は、ご来館をお控えください。
- ・ご入館時に検温ならびにマスクの着用をお願いします。
- ・館内にアルコール消毒液を設置しておりますので、手の消毒に使用してください。
- ・混雑緩和のため、展示室への入場を制限させていただく場合があります。
- ・館内では、会話を控えめにし、周囲の方と距離を保ってください。
- ・作品、展示ケース、壁や柱などにはお手を触れないでください。

利用案内

◇入館料

	一 般	学 生
特別展	1,000円	800円
通 常	800円	600円
邸宅・庭園のみ公開	600円	400円

※中学生以下は無料、団体20名以上は2割引

◇開 館 午前10:00～午後4:30(入館は午後4:00まで)

◇休館日 月曜日(月曜が祝日の場合は翌日)
12月21日(水)～2023年1月5日(木)
2月10日(金)、3月14日(火)

◇邸宅・庭園のみ公開(展示替期間)
9月27日(火)～10月7日(金)
11月29日(火)～12月9日(金)
2023年 1月31日(火)～2月9日(木)
3月15日(水)～3月31日(金)

◇詳しい展覧会情報は下記をご覧ください。

URL <https://www.e-kinenkan.com>



電車・バスでのご来館の場合

- 東武東上線・JR埼京線 川越駅
 - 西武新宿線 本川越駅 ●JR高崎線 桶川駅
- いずれも「川越駅～桶川駅」間の東武バスで
牛ヶ谷戸下車、徒歩15分

お車でのご来館の場合

- 圏央道川島ICより7分
- 川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより 第63号 2022年9月発行

編集発行 公益財団法人 遠山記念館
編集担当 井上 則子

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675
TEL: 049-297-0007 FAX: 049-297-6951